

明治實業讀本 卷一

教科書文庫
4
810
44-1909
2000054287

43334

教科書文庫

4
810
44-1909
20000
54287

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

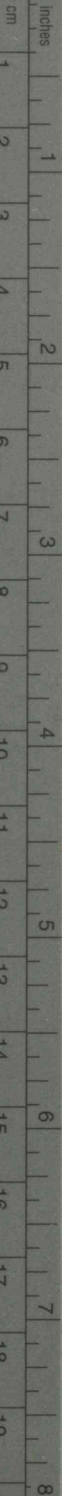


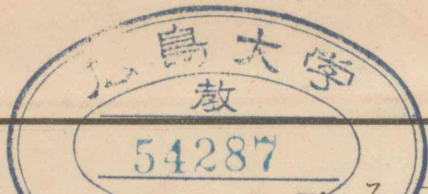
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





54287

本書は、専ら中等實業諸學校に於ける、國語の教科用として編纂せるものにして、其編纂趣旨、並に教科の配當は左の如し。

明治實業讀本編纂の趣旨 並に教科の配當

警 讀本の編次上、各課の間に其意味上の連絡あるやう序列するは、一般の例にして、編者は往々之が爲に尠からぬ苦心を爲すものなるが、此の如きは眞に無用の事なりと思惟す。何となれば、各課の内容の連絡たるや、教授法上、其要を得たるが如くして實は否らず、之を實際に徴するに、生徒は新奇と變化とを好むの結果、寧ろ毎課關係なき新事實、新意趣のものを歓迎するものなれば、所謂興味之惹起が教授上の第一義たる限は、此情に適合せしむる

明治實業讀本編纂の趣旨

教科書文庫

4

810

44-1909

2000054287

375.9
I221

文部省

實業學務局 泉屋清次郎

中村康之助 共著



明治實業讀本

東京 同文館藏版

広島大学図書

2000054287



を以て策の得たるものと爲さざるを得ざればなり。されば、本書に於ては、寧ろ内容の連絡なからんことを期せり。例へば、文學的作品の次には、理化學の説明文を以てし、其の次には政治・經濟の論文を以てしたるが如し。恐らくはこれ本書の一特點たるべきか。

一、本書八卷中、前四卷は文字・語句の難易を以て序列し、後四卷は意味の難易を以て序列したること。

實業界に於ける常用文字は、其數自ら限あるものにして、彼の文學者が推敲を要するが如き難解の文字は、殆んど其要なしといふべし。故に本書の前四卷は、高等小學校卒業以上の者に對して、十分實業界慣用の語句を授け得るに足らしめ、後四卷を以て文意の解釋を授くべく編纂せり。

一、専ら現代實用の文章のみを選択せしこと。

古文に類するもの、若くは明治以前の文體・文章の如きは、今日の實業界に要なきは固より、殊に實業學校の如き、教授時間の節約を重んずべき所に於ては、國語教授上かゝる閑散的文字に時間を費すを許さざること亦勿論なり。故に本書は凡て明治の文章文體をのみ採擇し、特に、主として現代大家の作を取れり。これ實業學校用の國語讀本として、本書の主張する一特長なり。

一、漢文を編入せしこと。

漢文の編入は或は奇異の感を惹かむ。否、寧ろ前述の理を以て推せば、全然排斥すべきものに似たらん。然れども、由來、漢文は、久しく我國の教育界に重きを爲したりしものなれば、現今或は今後と雖も其用を感ずること未だ尠しといふべからず。例へば、専門學校以上の諸學校の入學試験問題には、今尙、漢文を課するもの多きが如き、又一般實業家の家庭に於ては、軸掛物・扁額等に、多く

は漢文又は漢詩の書を以てするが如き、又、近時、滿韓地方に於ける我國力の發展上、及び對清貿易の發達に伴ひて、我國の實業家たる者は、假令清韓語に通ぜざるまでも、漢文の初歩を心得るの必要あるが如きこれなり。されば、本書は敢て漢文をも編入し、而して其の編入したるものは、皆この目的に副はんことを勉めたり。然らば、これも亦本書の一特長となすべきか。

一、農工商の各專業に偏する文章をば編入せざりしこと。

或は農學校用、或は商業學校用、或は工業學校用といふが如き名稱の下に、各専門業の實科の講義と選ばざるが如き文章を數多採編し、以て其の學校の特別教科書たらしめんとするが如きは、國語教授の目的を誤解せるもの、弊なり。科學を説くは別に其學科あり、何ぞ殊更に之を國語に附帶して、難澁偏理の文を以て生徒を苦しむるの必要あらんや、且つ此等は其の文の難きには

あらずして、只科學の階梯を追はざる場合に、其の理を解しがたしとするものなるが故に、其の科學の教授範圍に於てすれば、さばかり國語力を要するものにあらざるなり。本書は最も此點に注意し、成るべく興趣の中に實用文章を習ひ得らるゝやう編次せり。故に本書は農・商・工・水産等其の孰れにも偏することなし。

一、本書を教科書と爲すには左の配當に注意せらるゝを要す。

卷次	學年	本 科	本 科	豫科一年	豫科二年	豫科一年
卷一	第一學年	三ヶ年の學校	四ヶ年の學校	三ヶ年の學校	三ヶ年の學校	四ヶ年の學校
卷二	第一學年	(一學期二冊)	第一學年	豫科一年	豫科一年	豫科一年
卷三	第二學年	(二學期二冊)	第二學年	豫科二年	豫科二年	本科一年
卷四	第二學年	(全右)	第三學年	本科一年	本科一年	本科一年
卷五	第三學年	(全右)	本科二年	本科二年	本科二年	本科二年

卷の六	第三學年 <small>(全右 第三學期ヲ缺)</small>	第四學年	本科三年	本科二年 <small>(漢文ヲ除ク)</small>	本科三年 <small>(漢文全部)</small>	本科三年 <small>(全上)</small>	本科四年 <small>(全上)</small>
-----	----------------------------------------	------	------	--------------------------------	-------------------------------	-----------------------------	-----------------------------

明治四十二年一月

編者識す

明治實業讀本卷の一

目次

一	職業に貴賤なし……………	一
二	二宮尊徳(その一)……………	三
三	二宮尊徳(その二)……………	六
四	海……………	九
五	まことの學問……………	一三
六	勸學……………	一五
七	電話機の構造……………	一六
八	ベルナルド、バリッシイ……………	二〇

目次

一

九	各國の國旗	二六
一〇	注意深き人	三〇
一一	食物	三三
一二	銀行に入れる少年に	三六
一三	レッシングの比喩談數則	四〇
一四	河と山林	四四
一五	生涯の終とせよ	四七
一六	八重山吹	五五
一七	黄金の話	五五
一八	農業の快樂	五九
一九	智恵は小出しにすべし	六二

二〇	戸外の運動	六五
二一	天の橋立	六九
二二	森林	七三
二三	外國人の勤勉	七六
二四	ジオルジ、スチブソン(其の一)	八〇
二五	ジオルジ、スチブソン(其の二)	八七
二六	花と昆蟲	九一
二七	親友	九五
二八	金崎城址	九八
二九	錢屋五兵衛	一〇五
三〇	半家村	一一〇

明治實業讀本 卷の一 目次終

明治實業讀本 卷の一

一 職業に貴賤なし

武士

昔は、人の職業につきて、あやまれる説行はれ、武士をのみ
 貴みて、實業者をば賤みたること甚しかりき。今日にあり
 ては、何人もかゝる思をなすものなからんと思へど、なほ、ま
 どへりと見ゆるふしなきにあらず。

煩悶

ある處に、一人の少年あり。人と生れて青物商となるは、
 まことに耻づべきことなりとて、煩悶のあまり、つひに自殺
 したり。これ、その心得ちがひの甚しきものにして、かゝる

(Ammon)

立派

自營自活

職分

社會

人は、八百屋はおろか、屑ひるひにもなること能はざるものといふべし。こはたゞ一例なるが、その他、立派なる農家の子弟にして、その家業をいやしみて、名もなき官吏とならんことを希ひ、自營自活の職工たるを卑しとして、知人の食客たるを耻ぢざるもの多し。豈、笑ふべきことならずや。

「世の中は相持ち」といへる諺の如く、學者・官吏・農・工・商等、皆それぞれの職分ありて、各、その職分を全うして、はじめて、互に立ち行くものなり。若、學者・軍人のみありて、實業者なからんにはいかに。實業者のみありて、官吏・軍人等なからんにはいかに。社會は一日も成立たざるにあらずや。これを以て見れば、人の職業は、その何れを貴しとし、その何れを

品性

汚穢
純潔

賤しとする能はざるの理なるを知るべし。

職業は人をして貴からしむること能はず、又人をして賤しからしむること能はず。貴きと賤しきとは、人の品性に存す。人こそ職業をして高からしめ、又、卑からしむるものといふべけれ。總て職業は、心を勞すると、體を勞するに論なく、これを以て正當の利を得ることは、眞に尊ぶべきこととなり。手指は汚穢に染むとも、心の純潔を害するものにあらず。物の醜穢なるは人を汚さず。言行の悪しきことこそ、人を賤しくするものといふべけれ。

二宮尊徳 (その一)

繩
草鞋

相模國足柄郡柏山村に、二宮尊徳といふ人ありけり。十
四歳の時、父を亡ひ、十六歳に至りて母を失へり。家貧しか
りしかば、その弟を人に託し、己また人に養はるゝに至れり。
かくて、尊徳は毎朝早く起き、山に出でて柴を刈り、夜は繩を
なひ草鞋を作り、之を賣りて、僅に生活することを得たり。
或時、村に土工ありて、戸毎に人夫を課せられたり。尊徳
も、その中にありて勉めたれども、幼年にして、事に堪へざり
しかば、人々之を助けて、事を全うせしめたり。尊徳、心には
を愧ぢ、毎夜、草鞋を作りて、翌日、工事場に携へ行き、草鞋の破
るゝものあるときは、之を與へて、用を便せしめしかば、受く
るものは、深く之を徳としたり。

工事場

筆硯

尊徳は、讀書習字の志ありたれども、筆硯を買ふことを得
ざりしかば、竝に工夫を運らし、人の耕さる荒地を拓きて、
菜種を播き、善く之を培養して、遂に七八升の種子を得たり。
よりて尊徳は、之を賣りて筆紙を買ひ、毎夜撓まず勉學せり。
然るに、尊徳の養家にては之を悦ばず。勉學は、農業に用
なしとて、夜業を止められたり。此に於て、尊徳は夜は深更
に至るまで繩を綯ひ、草鞋を作り、人の寐ぬるを俟ちて、竊に
讀書習字をなし、朝は未明に起き出でて、山野に柴草を刈り、
田畑の耕作をなせり。又暇あるときは、川の工事に雇はれ
て賃錢を得、之を貯へ置きたり。かくて、貯金壹貫文に満つ
れば、之を貧人に分ち與へ、以て己の樂となせり。

農業

柴草

壹貫文

收穫

尊徳は、常に廢れたるものを利用することに心を用ひたり。或る時、村人の棄てたる稻の苗を拾ひ集めて、之を荒地に植ゑ、更にその收穫を他の荒地に植ゑ、毎年かくの如く増殖して、遂には莫大の米穀を得たりしかば、養家に請うて己が家に歸り、家屋を修繕し、田畑を買ひ入れて、再び二宮の家を立つるに至れり。

修覆

三 二宮尊徳 (その二)

斯くて、尊徳の農業に精しく、且、學問あることは、遠近に聞ゆるに至りければ、領主小田原侯は、尊徳に命ずるに、荒れ廢れたる土地を修めしむることを以てせり。尊徳、命に應じ

荒蕪

て、節儉と勤勉とを專一となし、數年の後、之を善き水田となし、且、許多の金穀を貯ふるに至らしめき。

饑饉

その後、下野常陸の荒蕪を修めて、功を奏し、又處々の貧家を興したること、擧げて數ふべからず。或は小田原地方の饑饉を救ひ、或は下野日光廟の祭田を修め、或は諸侯の求めに應じて河川を修め、田圃の利を興し、廢物を利用し、以て國家に益したること甚多かりき。尊徳は、安政三年、七十歳にして歿せり。人その死を聞きて、哀悼せざるはなかりきといふ。

琉球壘

尊徳は自ら儉約を守り、常に綿衣を着し、琉球壘に居り、食は一汁一菜に限れり。又その人を諭すや、至誠を以てし、往

涕泣
凡庸

奢侈

報徳義金

々にして自ら涕泣するに至れり。故に、如何に凡庸の人にても、感化せられざるものはなかりき。又その事を修むるや、務めて奢侈を禁じ、衣服器具などの驕奢に屬するものを省き、一に節儉と勤勉とを旨とせり。而して、自ら金錢を得れば、之を私せず、報徳義金と稱して、農家に貸し與へ、遂に積みて巨萬に達せりといふ。遠江駿河の諸州、今も全くこの法を行ふものあり。

龜鑑

尊徳の傳記を『報徳記』といふ。今上陛下、御覽ありて、之を賞したまひ、宮内省に下して、刊行せしめたまふ。又後に翁の功徳を追賞して、從四位を贈りたまへり。『報徳記』は農家たるものの龜鑑となすべきものなり。(横井時敬)

龜

四海

五大洋

副洋

暗礁

海は、面積、陸地の三倍餘なり。これを五に大別して、太平洋・大西洋・印度洋・南氷洋・北氷洋となす。又大洋の一部が、半島或は島嶼にて、小さく區劃せられたるを副洋といふ。日本海・黄海・オコツク海・ベーリング海の如きこれなり。

海底は、陸地の山嶽の如く、高き處あり。又谿谷の如く、深く凹める處あり。或は、原野の如く、廣く平かなる處あり。林の如く、海藻の繁茂して、生物の棲む處あり。山嶽の如く、高きところの、なほ水面下にあるときは、これを暗礁といふ。もし水面上に出づるときは、これを島といふ。

振動

水はその面平かなれども、その動くときは波を生ず。海
水に波を生ずるは、風の作用によるものにして、一部にこの
振動を生ずるときは、かならず他部に傳はるものなり。そ
の振動するさまを見るに、恰も一部の水が、波と共に他部に
うつりゆくが如くなれども、その實、水は一處に止まりて、唯
上下に動くに過ぎず。

颶風
海嘯

颶風もしくは地震のために起る大いなる波を、海嘯とい
ふ。海嘯は、海水、陸地に押し寄せ、家屋を洗ひ去り、田圃を埋
め、その狀實に見るに忍びざるものなり。明治二十九年、三
陸の海嘯、および三十五年、相模地方の海嘯は、人のよく知る
ところなり。

三陸
陸前
陸中
陸奥

潮汐
アゲ潮
ヒキ汐
干
満干の原因

海水は又一晝夜に二回づつ満干するものにして、これを
潮汐といひ、その満つるをアゲ潮、干るをヒキ汐といふ。こ
の満干は、恰も海水の増減するが如く見ゆれども、決して然
らず。これ、唯、月の引力によりて、他部の海水が一部に引き
寄せられたるのみ。月中天に到れば、其の直下は却つてヒ
キ汐となる。元來引力の作用は、水陸一様に及ぶものなれ
ども、陸地は堅くして、水の如く形を變ずること能はざるに
より、ひとり水のみ著しく高まるなり。又月に背ける方の
海水は、月に引かるゝ力、陸の月に引かるゝ力よりも弱きが
故に、おのづから後にのこされて、この部分もまたアゲ潮と
なるなり。

かくの如く潮の満干は、主として月の引力によるものにして、地球上の一點が、月に對して、二たび同位置を占むるまでに要する時間は、二十四時五十二分なりとす。されば翌日のアゲ汐は、今日のアゲ汐より、五十二分間遅るゝものなり。

満月と新月のときは、海水の高まること、常よりも著し。

これを大潮といふ。これ月と太陽との引力、ほとんど同一の海面に作用するによるなり。

又弦月のときは、海水の高まる度も、つとも少し。これを小潮といふ。これ月と太陽と、ほとんど直角の位置に來りて、互に吸引力を消し合ふによるなり。かくの如く潮汐の

大潮

小潮

閏

満干は、月の運行に伴ふものなれば、陰曆の日子によりて、満干の時刻をも知ることを得。この満干は、近海の漁業には、大いなる關係あるものなり。

五 まことの學問

學問とは、ひろき言葉にて、無形の學問もあり、有形の學問もあり。心理學・神學・數學等は、形なき學問にして、天文・地理・物理・化學等は、形ある學問なり。いづれも、皆知識をひらき、道理をわきまへ、人たるもの、職分を知らしむるものなり。知識を開き、道理をわきまふるためには、或は書物をも讀まざるべからず。故に學問には、文字を知ること必要なれ

有形

無形

智識

槌、鋸

普請

雜

言

古事記

經書史類

ども、世の人の思ふが如く、唯、文字を讀むのみを以て學問とするは、大なる心得ちがひなり。文字は學問をするための道具にて、例へば家を建つるに槌鋸の入用なるが如し。槌鋸は、普請に缺くべからざる道具なれども、この道具の名を知るのみにて、家を建つることを知らざるものは、これを大工と云ふべからず。まさしくこの譯にて、文字を讀むことのみを知りて、他を知らざるものは、これを學者と云ふべからず。所謂、論語讀みの論語知らずとは、即、これなり。わが國の古事記は暗誦すれども、今日の米の相場を知らざるものは、これを世帯の學問に暗き人といふべし。經書史類の奥儀には達すれども、商賣の法を心得て取引をなす

こと能はざるものは、これを商業の學問につたなき人といふべし。

活計
時勢
和漢洋

數年の資金をつひやして、西洋學は成業すれども、尙、一個獨立の活計をなし得ざるものは、時勢の學問にうとき人なり。これ等の人物は、唯、これ字を讀むといふにとゞまり、その功能は、俗にいふ飯を喰ふ字引にして、國のためには、寧ろ無用の長物といふべからむ。さては、世帯も學問なり。帳合も學問なり。時勢を察するも、亦學問なり。何ぞ必ずしも、和漢洋の書を讀むのみを以て、學問といふ理あらむや。

(福澤諭吉)

六 勸學

あだにすごすな、
 今日^イは再び、
 むだに暮すな、
 今年はまたも、
 たゞ時の間の、
 惜みし人も、
 まなびの庭に、
 撓^ウまず摘めや、

けふの日を、
 かへり來ず。
 このとしを、
 めぐり來ず。
 日影だに、
 あるものを。
 つどふ子よ、
 をしへ草。」

(高崎正風)

鄰室

七 電話機の構造

鄰室に備へてある電話機の鈴が、頻に鳴る。何處から掛

受話器

かつたのかと、立つて受話器を耳にあてると、

注文

モシモシ貴方は東京の黒田屋さんですか、私はネー、京都の鴨川屋ですがネー、先頃注文しました荷物がネー、漸く唯今着きましたから、一寸御知らせ申します、アーソーデスカ、有難う御座いました、サヨナラ。

といふ聲が、明に耳に觸れた。

遠隔

京都と東京、昔は五十三の宿驛を隔つる地とて、何程急いでも、往復一ヶ月はかゝつた處。今、急行汽車に乗りても十數時以上はかゝる遠隔の地。その間には、山もあり川もあり湖もあるといふ、遠い兩方の地に離れて居て、しかも一室の内に居る様に話を仕あふことの出來るといふのは、如何

にも便利な器械である。これも開け行く學問のおかげである。

構造

軟鐵

電話機には、新舊兩様の機械がある。新式の方は至つて簡単な構造であつて、今では多くこの方を用ゐる。しかしその構造は大概同じなので、箱の内に、電磁石と呼ぶ軟鐵の棒と、その直ぐ前に極くうすい鐵板とが置いてあるのである。そしてこの棒には、絶縁導線といつて、絹で覆うてある銅の線が、螺旋狀に巻きつけてあつて、その線の端は、箱の外線の線につづいてゐる。

螺旋狀

そこで、我々がこの箱の内へ音聲を入れると、その響が鐵板にふれ、鐵板が振動して、又電磁石に響く。電磁石は天然

發聲

送話器

の磁石と全く同じ様な電氣力を有つて居るから、今響いて來た語聲と全く同一の調子とを現す電氣をおこす。この電氣が前の絶縁導線を傳つて、電話をかけ様といふ先方の電話機内に在る電磁石に傳はり、またその前にある鐵板に響くから、この板が振動して、元の通りの語聲をそのまま發聲し、まるで直接その人の聲を聽く様な感じがする。

電話は、か様な工合になつて居るもので、言語を送る機械を送話器といひ、言語を受ける機械を受話器と呼んでゐる。しかし、この名稱は用ゐる時の作用によつて名附けたもので、構造は何れも全く同様なのである。だから、一つの機械を備へて置けばよいのであるが、それでは不便な場合が多

いから、一つは絶えず之を耳に當て、置くのと、一つは之を口に當て、置く爲に、今では同じ機械を二個づゝ備へて置くのである。

八 ベルナルド、バリッシー

昔、フランス國に「ベルナルド、バリッシー」といふ人ありけり。その父母、甚貧しかりければ、「バリッシー」はさらに學校の教育を受けたることなかりき。長じて、「ガラス」に爲がき、また、土地を測量することを業としけれども、妻子ある身の、これをして生計を立つるには足らざりしなり。

當時、「フランス」の陶器は、粗惡にして、釉藥栗色なり。「バリッ

測量

釉藥

シー」これを改良せむと思ふこと久しかりしが、一日、「イタリー」の名工「デラ」の製せる磁器を見て、心ましますこれに傾けり。然れども、妻子あるがために、自ら「イタリー」に行きて、その秘を探ることを得ざりしかば、自己の考を以て、種々の藥品を求め、白色の釉藥と彩色の藥とを、探り出さむことをつとめたり。誠に、これ、暗夜に物を求めむとする類にして、あはれにも、また大膽なる事なりけり。

かくて、「バリッシー」は、竈を築き、土器を買ひ、種々の藥品を塗りて、焼き試むること年月をかさぬれども、試験一も中らず。さらぬだに、生計ゆたかならざりしを、今は試験の費用に追はれて、貧困已に迫れり。されば、身自ら試験の薪炭を買ふ

竈

懇意

こと能はず、懇意なる「ガラス」工、又は、瓦工の窯の一隅を借りて、小試験を爲すこと多年にして一も成らず。

彼は、これがために、毫も心を屈せず、遂に一の大試験をなさむとて、あるかぎりの錢財をつくして、三百個餘の土器を求め、薬を塗りて、「ガラス」の竈に焼くこと數時間にして、いだし視るに、白色の釉薬焼きつきたるもの、たゞ一個あり。

錢財

彼は、既に成功の緒を得たりと思ひければ、自ら石瓦を積み、家の傍に竈を築きしが、七八箇月にして漸く成れり。

こゝに、彼は、土器の下地を製造し、更に薬料を塗りて、早朝これを竈の中に入れ、火をたきて日暮にいたりしかど、薬未だ焼きつかず、遂に再び旭の光を見るに至れり。されど、彼は

端然

猶端然として竈の前を去らず、その妻、僅ばかりの朝飯を持ち來りて與へけるが、彼はこれを食ひつゝ、うちまもりてありけるほどに、その日もまた空しく暮れぬ。かくすること七晝夜にじて、遂に成らず。彼は、面燻ぼり、身體疲れ、更にこの世の人とも見えざりき。

燻

「パリッシー」はこれをことゝもせず、こは薬料の未だ宜しからざるがためなりとて、更に工夫をこらしけれども、費用已に盡きたれば、友人の助を乞ひ、辛うじて物品を調べ、やがて又竈に火を點ぜり。かくて、薬料未だ焼き着かざるに、薪また盡きぬ。彼は機を失はじとて、家の板塀を引き抜きては、投げ入れ、投げ入れしけり。板塀已に盡くれども、薬は未だ

板塀

寢臺

着かず、彼は猶十分間、火力を保たせむとて、家なる椅子を持ち出て、投げ入れぬ。まだ何をがなと見廻すに、寢臺の外には一物もなかりければ、これをも打ち碎きぬ。今よりは、一家の者いづくに居りいづくに眠らむ。妻子はその有様を見て、發狂せしなりと思ひ、泣き號びて逃げ去れり。然れども、この最後の火力により、白色の釉薬はじめて焼き着きたり。「バリッシー」の喜、それいかにぞや。

才覺

然れども、この時は、唯、焼き着け得たりといふまでにて、賣品とする程の陶器にあらざりき。されば、彼は、猶、幾多の試験を要しけれども、今は才覺已に盡きて、如何ともしがたくなりぬ。こゝに、酒屋の主人あり。「バリッシー」の志の撓まざ

詬罵

るに感じ、その家に食客たることを許したり。「バリッシー」は、これがために僅に生命をつなぐことを得て、毎日試験に従事すること半年なりしが、またもや失敗せり。

腓
蓬髮徒跣

「バリッシー」自らこの時の事を語りていはく、余はいかなる困難をも意とせざりしが、唯堪へ難がりしは家人の詬罵なりき」と。誠に終日勞苦の後、家に歸りて妻子に慰められ、又心あへる友人とうち語らひてこそ、失敗も慰み艱難にも堪ふべけれ。出でては近隣に笑はれ、入りては家族にはづかしめられ、衣破るれども綴る人なく、腓の肉は悉く落ちて靴下を着くるに由なく、蓬髮徒跣、悄然として竈の前に立ちたりし「バリッシー」が心はいかにありけむ。

寫生

然れども、精神一到、何事不成（カザンラ）「パリシ」經驗を積むこと十八年、遂に精良無類の陶器を作るを得たり。しかのみならず、畫くところの草木鳥獸までも、一々寫生して工夫しければ、その巧妙また比類なく、その名世界に高くなりぬ。前年「ロンドン」において賣物に出でし「パリシ」の皿は、徑一尺あまりにして、價わが一千六百圓に當れりといふ。また以て、その貴きを知るに足らむ。（中村正直著「西國立志編」）

九 各國の國旗

色彩

家々にそれぞれの紋章あるが如く、各國にそれぞれの旗章あり。家紋には大抵色彩なけれども、各國の國旗には、青

爛漫

黄・赤等、種々の色を用ふるを以て、運動會・祝賀會等に際し、各國の國旗を一行に懸け連ねたるは、百花の爛漫として一時に咲き出でたるが如し。

國旗には商旗と軍旗とあり。佛蘭西・和蘭・葡萄牙・ブラジル・チレ等の國々にては、商旗も軍旗も同一にて差別なし。英吉利・獨逸・伊太利・奧太利・露西亞等には、商旗と軍旗と、各別あり。

諸外國の國旗を見るに、多くは二種以上の色彩を用ひたり。我が同盟國たる英吉利國の國旗は、青地に米字形の染分をなし、佛蘭西は、縦に青・白・赤の三色を並べたり。佛蘭西の旗を横にして、赤・白・青と並べたるは和蘭の旗なり。露西

亞の商旗も、それに似て、唯その色の順序の白・青・赤となりたるのみなり。露西亞の軍旗の白地に青の斜十字なるは、日露戦争の畫にて諸子の熟知する所なるべし。

獨逸の旗は、和蘭の如く、横に三色を並べたるものにて、その色は黒・白・赤なり。瑞西の國旗は、赤地に白く十字を染め出せり。赤十字社の赤十字はそのうらを取りたるものなり。これ赤十字の會合が、始めて同國に於て催されたる紀念の爲めなりと云ふ。

旗章に動物を描けるは、獨逸の軍旗に鷲あり。暹羅の國旗に象あり。波斯は獅子の劔を振ふ様を寫し、支那の國旗は、龍の珠を弄する狀を描く。天體を附したるは、土耳其

聯邦

迷信

單純

四表

ジプト等、皆弦月と星とを描き、亞米利加合衆國は、建國當時の聯邦の數、十三を紅白二條にあらはして、上の隅に現今聯邦の數を星辰にてうつせり。朝鮮の國旗の八卦を寫し出せるは、迷信多き國柄も思ひ出されてをかし。

わが國の日章旗を見よ。紅の一色にて、白地に日輪を寫し出せるは、天壤と窮りなき神勅によれるものにて、その彩色の單純なるは、よくわが國民の淡泊なる性情を示せるものといふべく、弦月や、星や、日輪に比べては物の數にもあらざと見ゆ。聯隊旗、軍艦旗に至りては、豊さか上る朝日影をうつして、赫赫たる光明の四表を照すさまを描けるは、實にわが國民の勇武、宇内に輝くを示すものにあらざや。(芳賀矢二)

偉大

玻璃

クリ
ビートル
ギヤマ
ガラス
ガラス

眼鏡匠

一〇 注意深き人

物事に注意深き人は、よく偶然の出来事を捉へて、偉大なる業を成し遂ぐる事あり。昔は日月を、神と崇めたりし天體も、わづかに二三枚の玻璃鏡玉の作用によりて、廣大なる世界の一たることを認めらるゝに至らしめたる、かの望遠鏡の如きも、注意深き一職工によりて、實に偶然なる出来事を基として、考へ出されたるなりき。

高塔

トウ
タカ
高塔

不思議

遊び居りし小女が、突然聲をあげて、「父よ父よと見られよ、彼の遠き高塔がたゞ眼の前に見ゆることよ」と叫びける。「ハンス」はその聲のあまりに大なるにおどろき、「何事なるか」よ顧みしに、小女はその左右の手に、各一個の眼鏡をもちつゝ、右手を伸ばし左手をちゝめて、さて二つの鏡玉を通して、はるかにかすみわたれる高塔を望み居りぬ。

不思議のことゝ思ひしかば、「ハンス」は小女のもてる鏡玉をよくよく、検査せしに、左手のものは一面平かにして一面凹み、右手のものは一面平かにして一面凸なりき。さては用こそありければ、「ハンス」は自らその鏡玉を以て、小女のなししごとく、試みしに、果してその言にたがはず。たゞ見れば、

屋根

屋根も窓も分ちがたなき高塔は、二個の鏡玉を通して、あたかも隣れる家を見るが如く、ありありと眼の中に入り來れるなりき。

「ハンス」の喜び、世の常ならず。かくて板紙を丸めて、長き管を作り、その中に程よき距離を置きて、數個の鏡玉を嵌め、さまざまに工夫を重ねて、遂には、粗末ながらも一個の遠眼鏡を製するに至れり。而してこの粗製の遠眼鏡こそ、今日の精巧なる望遠鏡をつくりえし基なりけれ。

すべて、世の愚かなる人は、事を成すによき機會來りても、これを捉ふることをなさず。又、學問なき人は、偶然のよき出來事起りても、その智識を試むること能はざるものなれば、苟も世にすぐれたる業をなさんとおもふ人は、學を修め

機會

粗製

習慣

智を研くと共に、よく物事に注意する習慣をつくるこそ肝要ならぬ。

一一 食物

諺に、「禍は口より出で、病は口より入る」といへり。これ、食物の慎まざるべからざるを戒めたるものにして、實に、疾病は食慾を節制せざるより起ること多きものなり。

然れども、吾人は、日に三度の食事を要し、又、種々の嗜好物あり。若しこれを取らざるときは、不快を感ずるのみならず、遂には、空腹を覺えて、全身の疲勞を來すなり。これ、生理

食慾

疲勞

も、食慾の如何によりて、ほゞその分量と種類とを定むるを得べきものなり。即ち濃厚なるものに飽けば淡泊なるものを好み、労働すれば食慾を進むるが如き、これなり。

されば、食物は、平素用ひ慣れたるものに就き、その好むところに従ひてこれを取れば、過なしといへども、動もすれば分量を過ごして、病は口より入る」といふ諺を實現せしむることあり。西洋の諺に、「飲むことは犬の如くし、食ふことは猫の如くすべし」といへるは、飲食ともに少量なるべしとの意を寓せしものなり。(關以雄著衛生讀本)

一二 銀行に入れる少年に

實現

招聘

ロンドン
伯林
ロンドン

訓誨

瑣末

敏捷

謹啓御書狀披見多年御勉強のかひありて學校を御卒業なされこのたび某銀行よりの招聘を受けられ候よし敬承いたし候かく承る小生のうれしさいふべくもあらず候へばまして長年その上にと辛苦なされたる御兩親の御慶げにかばかりならむと想像せられ候こゝに「ロスタチャイルド」家創業の主人がその實驗より得たる訓誨なりとておのが銀行の壁上に大書せしめたるものなりといふ座右の金言見當り候まゝ左にしるして貴覽に供へ候

- 一、事務を取るに當りては瑣末なることまでも仔細に吟味すべき事
- 一、萬事に敏捷なるべき事

勇往邁進

- 一、考察は長かるべく決斷は速なるべき事
- 一、勇往邁進奮然として事に従ふべき事
- 一、困難を忍ぶべき事
- 一、競争には勇なるべき事
- 一、誠實は極めて神聖なるものと心得てよくこれを守らざるべき事
- 一、商賣上には特に心を用ひて決して虚言を吐くべからざる事
- 一、無用の交際を爲すべからざる事
- 一、有るを有るとせよことさらに無き風を粧ひ飾るべからざる事

神聖

虚言(ウソ)

償還(ツケ)

一擲

刻苦

慇懃(ツツシ)

- 一、借りたるものは速に償還すべき事
 - 一、機に臨みては金錢を一擲するの要ある道理を覺るべき事
 - 一、烈しき酒を斷つ事
 - 一、時間を善く用ゐる事
 - 一、運に依頼するの念を斷つべき事
 - 一、何人に對しても慇懃なるべき事
 - 一、いかなる折にも失望すべからざる事
 - 一、刻苦勉勵すれば必ず成功するものなることを確信すべき事
- 兄英語に達し志望極めて高しこの般の文字に接して恐

老婆親切

らくは區々の老婆親切と一笑せらるゝならむ然れども東坡も孔子の道を評して「匹夫匹婦もいふべくして聖賢も行ふこと難し」と申され候最高尙なる道は最平明なるものに候よくよくこの理を覺りてこの格言に顧みまことの成功に達せられむこと切望に堪へず候來む日曜日の午前にはぜひ御出下されたく久しぶりにて半日の閑話相試みたしと待ち上げ候匆匆々々（竹越與三郎）

閑話

一三 レッシングの比喩談數則

驢馬、獵馬と競争を試みて、いたく敗を取りて世の笑を招きたり。しかも、彼は平然としていへり、余は今にしてわが

驢馬

平然

新ヨリ午八百
年前生しん

鷺毛

敗れしことの偶然にあらざるを知れり、余は實に一二箇月前より足を傷めてその痛今にやまざるなり」と。

交遊

鷹揚

武骨

鷺毛の純白なるは、まことに霜雪とその美を競ふに足れり。嘗て一羽の鷺の、しきりにその羽毛の美を誇れるがあらりて、ひそかに思へらく、わが前生は恐らくは鶺鴒なりしならむと。これより、彼はその同類と交遊することを屑とせず、ひとりその群を離れて、しひて鷹揚なる態度を装ひつつ、優然として池上に逍遙せり。かくて、彼は、ふと、わが頸のつけねの短きに過ぎて、外觀の醜きに心づきぬ。やがて、満身の力を込めて、それを引き延さむとせり。されど、そはあだなりき。彼の頸のつけねは、あまりに武骨過ぎて、引き延さむに

も力及ばざりき。さても彼が苦心の結果はいかなりしぞ、
彼は鵠コトとなること能はずして、却りて一個の笑ふべき鶩と
なれり。

變種

嘗て一匹の犬の諸國を旅行して歸り來れるが、その仲間
に向ひて、われらの種族は到るところ皆變種を生じて、その
純粹なるものは、今や殆どそのあとを絶てり。わが見し中
に、たゞ印度といふ遠き國にのみ、なほ眞の正種の犬ありて、
彼等は實に獅子に對するも恐れざる勇悍の性を具へたり
といふに、それを聞き居たりし一匹の獵犬は、直に、彼は果して
獅子を懼伏する力あるかといふ。なに懼伏とや、そは余の
即答に苦むところなり。されど余は少くとも、彼は獅子に

懼伏
フオンスレ

稱譽

對して悚然たるものにあらざるを信ずといふ。獵犬はす
かさず、さては君の稱譽する印度の犬は、所謂愚中の少愚な
るものに過ぎずといひて、聲たてて笑へりとかや。

英邁

曾て一匹の驢馬を、その危難より救ひたりし獅子の、それ
と相伴りて森に行けるあり。無遠慮なる鷄これを見て、樹
上より呼びて曰く、英邁なる君よ、君は驢馬の如き輩と伍す
るを耻ぢざるかと、この時獅子は靜に、何者たりとも來りて
余に投ずるものは、余は好みて仁俠を施さむとすといへり、
大人君子はいかなる弱者をも棄てざるが故に、彼等は常に
その下に集まることを喜ぶ。

仁俠

亂暴なる一少年を乗せて、さも得意氣に、こゝかしこ駈け

耻辱

まはれる馬あり。牛その馬に向ひ、「さばかりの少年に御せらるゝこと、汝が至大の耻辱にあらずや」といへば、馬はふりかへりつつ、事もなげに答へて、「されど、いま、この一少年を振り落したればとて、余は幾何の名譽をか博し得む」と、いへりきとぞ。

一四 河と山林

灌溉

河には、大なる効用あり。田に灌溉して稻を育て、舟を通じて運漕の便をあたへ、又は水車を動かして米を搗き、機械を運轉して電氣をおこすなど、その他あげていふべからず。又この河水をひきて飲料水となす地方も少からず。東京

飲料水

洪水

大阪の如きは、水道鐵管によりて飲料水をひけり。河の利益の多きこと斯の如くなれども、一度洪水となる時は、堤を破り、家を流し、人畜をそこなひ、田畑を荒して、その勢、實に凄じきものなり。

上流

河は洪水の時のみならず、平時にても驚くべき仕事をなすものなり。即ち絶えず、上流の地面を崩して、その土砂を下流にはこぶなり。故に上流の高き地面は、徐々に崩れて、下流の河底を埋め、水害のうれひを増す。河の海に流れ込むところにては、水勢、自然に静となるを以て、運ばれたる土砂はそこに止まり、漸々水面よりも高くなり、數十年、數百年を経れば、そこに三角形の新しき地面を生ず。

三角洲
サンクワスイ

利益

山林保護

土砂留
雲霧
旱魃

河はかくの如く、われらの利益とも害ともなるものなれば、河の利益のみ受けて、その害を防ぐやうにせざるべからず。その手段は、山林を保護するより外になし。山林茂り居れば、木の根、又は落葉等に、多量の雨水を吸ひ込み、降雨續くとも、河水一度に増すことなき故に、洪水のうれひなし。即ち、河溢れて人畜・田畑を荒すやうなる事なし。また、山林茂り居れば、木の根おのづから土砂留になる利益あり。山林の保護をつとめて、薪をみだりに伐り出さぬやうにすれば、洪水の害なきのみならず、樹木の茂れるため、自然に雲霧をおこして、時時、降雨あるを以て、夏の中、旱魃の憂なし。且、樹木は動物のはき出したる炭酸瓦斯を吸ひ、動物の生

酸素

活に必要な酸素を吐き出すを以て、茂りたる山林は、人の氣を快くし、又その地の風景を善くするものなり。

この故に、山林の樹木を伐るには、年限をさだめ、伐るに隨いて苗木を植ゑ、繼ぐことにせざるべからず。これ山林保護の手段なり。(小學校國語教科書)

一五 生涯の終とせよ

北獨逸のある町に、ひとりの商人住みけり。名を「ミュルレル」といふ。彼は近頃途上にて、しばしば立派なる若き紳士の、丁寧エシヤフに會釋して、過ぎ行くに逢へり。もとより一面識

逢

第 二期

汗カ
汗カキ

紳オホキ

會釋エシヤフ

内訳した
うたがはし
不思議
招待

もなきものなれば、いぶかしきこと、思へど、たゞ先方より會釋せらるゝまゝ、我もまた丁寧に答禮してありけり。

ある日、ミユルレルは、とある友人の招待を受けて、その家に行きぬ。導かるゝまゝに客間に入れば、既に一人の客ありて、主人なる友と、さも樂しげに話し居たり。ふと見やれば、さても不思議や、その人は彼の若き紳士なりけり。

紹介

友は「ミユルレル」の入り來れるを見て、つと立ちてこれを迎へ、さて若き紳士に向ひて紹介せむとせり。若き紳士は、この時立ちあがりて、丁寧に「ミユルレル」に會釋しつゝ、主人に向ひて「紹介の勞をとらるゝ要あらず、我はこの御方とは、多年の知己なるを」といふ。「ミユルレル」はこゝぞと思ひけ

誤解

れば、ことばをあらためて、君はさだめて誤解をなし給ひてやおはせむ、われはまことに幾度か君の丁寧なる會釋を受けまゐらせぬ、されど、われは全く君を知らざるなり」といへり。若き紳士は「されどわれは君を忘るゝこと能はず」と答へて、さてことばをつぎ、われは今日こゝに親しく君の恩を謝しまゐらす期に逢ひしを喜ぶ」と、さもゆかしげにいふ。「何をもてわれに恩ありとはいはるゝぞ」と、なほもいぶかしげにいへば、「そはまことにひと昔のことなり。されどわれには終生忘られぬことあり。そのあらましを語り申さむ、しばしの間聽かせたまへ」とて、語り出でぬ。

終生

指を屈すれば、はや二十年の昔となりけり。己れの、小學

青物市場

校に通へる頃のことなりき。ある日の朝、常の如く學校へ行きぬ。その途上には、いつも青物市場の開かるゝ處ありて、その朝も、賑はしげに人人の商ふさま、先づわが眼に入りたり。知らるゝ如く、彼處オチノの市場にて最も賑へるは、菓物店なり。時はまさに秋の末なりければ、種々の菓實の水したたらむばかりに、美しくしう籠の中に盛られたりしが、殊にわが心をひきしは、林檎の實の赤く色づきたるなりけり。子供心の、何とはなしに立ち止りて、おのれは、しばし、うち眺めて居たりけるが、その店主は、今や隣なる婦人と物語しつゝ、その背を店の方に向けたり。あゝ、今思ひ出すだに、恐ろしき心地せられて堪へ難し。されど、神よ許させ給へ、そは眞

菓實

林檎

出來心

おそろしき
(おそろし)

瞬間

に一時の出來心なりき。さても、いかなる悪心なりしぞや、かゝる多くの林檎の中より、たゞ一つ二つ取りたりとて、店主の氣附かむやうはあらじと、ふとおぞましき心浮びぬ。かくて、あたりを見廻しつゝ、靜にそのそば近く寄りぬ。そと、その一つを取りて、急ぎわが袂に入れむとせり。あゝ、その瞬間シユンカンなりき。己れは、耳のあたりに激しき打撃を受けぬ。驚きてふり向けば、一人の男の立ちけるが、己れを見おろしつゝ、少年よ、何とてかゝる悪心をば起しつる。ゆめ、再びかゝる悪心を起すことなかれ。われは、汝のこの悪心をば、今日生涯の始めとして、今日生涯の終とせむことを望む」といひぬ。おそろしさはづかしさ、一時に攻めきて、おのれはい

ひがたき心地にまどひぬ、さても、その人の聲のゆかしさ、心の底までしみとほりて、今に忘れず。

昨日までは、さまで心をひかざりし學校の教も、これよりは、一々、心に刻まるゝやう覺えて、「生涯の終とせよ」との一語は、常に新しき記憶を起さしめぬ。その後、おのれは商業學校に入りしが、卒業の後、ある商館に入りて、南亞米利加に航し、彼處にて長く貿易の業を営みたり。君等も知らるゝ如く、彼處の貿易ほど、不規則なるはあらじ。人を欺き、商品を偽りて、ただ營利をのみ心がけ、さる方に巧なるをば、あつばれ、うてよき人よと、われも人も、いふが常なり。ことに取引先は、何のゆかりもなき外國人のみなれば、得らるゝかぎり

商館

取引先

年少氣鋭

の利益を得て、本國に持ち歸らむは、こよなき國益ならずやなど、いひあへり。あはれ、おのれもこの間に交りて、年少氣鋭の、さらぬだに功名富貴の念強き折から、多少の不正は顧みるべきことにあらずなど、思いひがめて、あやしき手段を心中に浮べしこと、そも幾度なるかを知らず。さても、ありがたきは、彼の人のことばなり。その度毎に、心の底より湧き出づるは、「生涯の終とせよ」との一語なり。かくて、この訓戒は、遂におのれをして、六年の長き間、未だ嘗て、一たびも不正の事に指を染めさせざりき。おのれのありし商館の信用は、かくて今に變らぬも、全くこれが爲めなり。おのれは、彼處にて、實に莫大なる利益を得たり。その齋

訓戒

齋

自負

し歸りし金額はいかに多額なりしぞ。かくて、己れは、こゝにいとゆたかなる生活を送れり。されど、君等よ、おのれの自負するを許させ給へ。わが齎らし歸りし金銀の中、たとひ一厘たりとも、いさゝかの不正を意味するものあらず。神よ、願くば長へに、わが恩人を恵み給へ。

謝辭

かく、かたり終るや、紳士は、つと立ちて、「ミユルレル」のそばに寄り、跪きてその手を取れり。さて、涙をやどしたる眼に見上げつゝ、「わが恩人よ、君も今はわが心からの謝辭を受け給ふべし」と、強き聲にていひぬ。こゝちよげに見おろしたる「ミユルレル」の眼にも、あやしと聽き居たる主人の眼にも、皆涙をやどせり。

一六 八重山吹

八重山吹の、　　ひと重だに、
人のゆるさぬ、　　枝をるな。
花ものいはぬ、　　世の中も、
神はさやかに、　　見そなはず。

(千家尊福)

一七 黄金の話

金属の中にて、黄金は最よく人の眼にとまるものなり。故に、古代の民も、はやくその存在を認めて、これをさまざま

裝飾

の裝飾に用ひたり。

黄金の天然に産するは、種々の状をなして、あらはるれど、その種類の上よりいへば、これを自然金・黄金・鑛黄金を交へたる他の鑛石の、三つに別つことを得るなり。

自然金とは、黄金のまゝにて、天然にあらはるゝをいふ。

これに砂金山金の二種あり。砂金は、その稜に多少の丸みある黄金の粒にして、河及び海などの砂礫に混じ居るものなり。これを採取するには、先づ木にて桶を作り、水をその中に流して、これに砂金を交へたる砂礫を投入するなり。

かくする時は、普通の泥土と砂礫とは、皆流れ去りて、たゞ黄金の粒のみ桶中にとゞまるべし。砂金の粒は、大小種々ありて、中には、その重量二百匁に近きものもあり。彼の、世界の金鑛として、世に名高き、「クロンダイク」、「カリフォルニヤ」等の金は、多くこの砂金に屬するものなり。わが國にては、北海道なる北見・石狩の二國を以て、その産地とす。又、山金とは、岩石中の石英等に、微細なる粒・板・毛などの形をなして、つゝまれ居るものなり。通例肉眼にて見ること能はざるほどの小さきものなれど、時としては、美しき形をなして見ゆることあり。わが國の佐渡の金山の如きは、全くこの山金の部に屬するものにして、深く山に堀り入り、盛に石英を採掘して、その中より黄金を分取するなり。

黄金鑛とは、黄金を含める鑛石をいふ。北亞米利加にて

採掘

肉眼

微細

製煉

は、この種の鑛石に富める鑛山ありて、その製煉盛に行はるれど、わが國にては、未だ黄金鑛と稱すべきもの發見せられず。

黄金を交へたる他の鑛石とは、黄銅鑛・黄鐵鑛等の他の鑛石の中に、別に黄金を含めるものを云ふ。

形跡

以上三種の中、最も採取に使なるは、砂金に如くはなし。されば、未開の人民は、先づ砂金を發見して、これを採掘し、それより進みて、漸く岩中の黄金をとることを解するに至れるなり。彼の佐渡の金山の如きも、今は山金の採掘をなすに過ぎざれども、昔は盛に砂金を採取せしものと見えて、今猶その形跡を殘せり。

世界中、最大の産金國と云ふべきものは、亞米利加合衆國にして、これに次ぐを濠太利亞・加奈太等となす。これらの諸國は、皆毎年十萬「キログラム」以上を産す。わが日本國の如きは、古來黄金國として、その名世に高けれど、その實は、毎年僅に二千「キログラム」を産するに過ぎざるなり。

(神保小虎)

一八 農業の快樂

戸外的

農業は、人をして健全ならしむ。すべての人は、樹木と同じく大氣中に生活せざるべからず。しかして、農業の生活は、概して戸外的生活なるを以て、最もこの目的にかなへる

性急

ものなり。
農業は、人をして着實ならしむ。所謂、人事を盡して天命を待つといふ妙理は、手を農業に染めて、はじめてよくこれを了解することを得べし。いかに性急なればとて、播きたる種の、直に實らむことを望むものはあらじ。また、いかに奇法ありとも、播かぬ種の生ずべき理はなからむ。人若しこの間に身を置かば、自然的作用が、いかに天然に於て大切なるかを知ることを得む。

妙機

農業は、人をして科學的精神を養はしむ。これ、農業は常に天然と接するものなれば、その發達、その變遷、その活動の妙機は、仔細にこれを觀察することを得べく、また、その間に、

因果

おのづから因果の理法の、整然として動かすべからざることを會得することを得べきなり。

野花幽草

農業は、人をして美趣を解し、詩情を養はしむ。支那の陶淵明は、嘗てその詩興を田園に養ひ、その詩材を農業にとりて、千古の大詩人となることを得たりしにあらざるや。その他、その詩趣を無名の野花・幽草の上にたづねて、天地の妙機を詠唱し、以て、その大詩人たる名譽を、擔ひ得たるもの、東西古今その例に乏しからざるなり。

餘業

農を本業となす、もとより可なり。他の職業に従事するもの、これを餘業となす、また頗る可なり。しかして、これを餘業となすにおいては、何人といへども、容易にこれを行ふ

霄壤

ことを得べし。掌大の庭園も、數株の花木を培養するに於て餘りあるにあらずや。いはんや彼の地方に別墅を有する紳士豪商においてをや。これほど容易のことはなかるべく、また、これほど愉快のものはなかるべし。これを、彼の鳥獸を殺戮して、以て快となす銃獵の如きものに比すれば、その趣、その樂、ただに霄壤の差異あるのみならむや。

(徳富猪一郎著、社會と人)

一九 智惠は小出しにすべし

智惠は小出しにすべしとは、古人の金言にして、大なる智惠を一時に現して、一時に天下を驚かさんとするよりも、朝

遲滯

愚鈍
迂濶

了簡

に夕に、物に觸れ事に當り、遲滯なくこれを處理して、颯々と世を渡るべし。鼠捕る猫は爪を隠すといふ。隠すは宜けれども、生涯隠して鼠を捕らざるは、爪なきに等し。世間の後進生が、動もすれば、英雄豪傑を氣取りて、人事に頓着せず、愚鈍といはるゝも迂濶と評せらるゝも、馬耳東風にして、高く自ら構へ、此事は拙者の本領に非ず、其の業は自分の柄に相應せずとて、勝手次第に好き嫌ひする其の有様は、病身なる貴公子が飲食の物を選ぶの情に異ならず。蓋、後進生は、胸中に智惠の大なるものを藏めて、容易にこれを用ひず、用ふれば即ち大いに用ひて、大いに事を爲すの了簡ならん。されども、如何せん、事は來りて人を求めず。我より進んで

技倆

事を求むるに非れば、遂にこれに逢ふことなかるべし。鼠を捕らんと欲せば、猫より進むべし。鼠の來りて猫に觸れたる例を聞かず。雷に鼠を求むるのみならず、蜻蛉にても蟬にても、見當り次第に飛掛りて、平生の技倆を現はすこそ猫の本分なれ。猫の爪決して隠すべからず。捕物の大小に論なく、苟も技倆を試むるの機會あらんには、之を空うせずして、功名を現はすべし。これを評して、爪の小出しといふも可なり。在昔、豊大閤が、木下藤吉の時より、次第次第に立身したるは、豊公の大智を持ちながら、初は草履取、次で炭薪奉行、又次で、普請奉行等、次第次第に、その智恵を小出しにして、甲斐甲斐しく事を辨じ、漸くにして大名に立身すれば、

掌握

大名の智恵を出し、遂に天下を掌握すれば、平天下の智恵を出したることなり。若しも當時の木下藤吉が、武家奉公の初より英雄豪傑を氣取りて、草履取は拙者の本領に非ず、炭薪奉行は吾身の柄に相應せずと力味たらば、遂に天下も手に入らざしりならん。太閤畢生の大業は、智恵の小出しに成るものといふべし。(福澤諭吉)

二〇 戶外運動

新陳代謝

運動は、血液の運行を促がし、体内の新陳代謝を盛ならしめて、身體各部の調和的發育を遂げしむる効あり。昔より、「小供は風の子」と稱へて、戶外の遊戯を好み、母の懷にある嬰

兒も外に出づるを喜ぶなり。これ、自然の要求より來るものと知るべし。

されば、同じく運動と稱する中にも、これを衛生上より見るときは、戶外に於て新鮮なる空氣を呼吸し、うらゝかなる日光に浴するを以て、第一の要件となさざるべからず。職工が塵埃にむせびつゝ、工場内に作業するが如き、又は、役所、會社等の、空氣の流通あしく、光線の達せざるところに、業務を執るが如きは、たとひ體を勞し四肢を動かすとも、衛生上、眞の運動といふべからず。故に、かゝる人は、殊に戶外の運動に心掛けざるべからず。

戶外の運動中、最、簡易にして、且、効力の大なるものは、散歩

塵埃

鳥打帽

なり。手には一枝の吟杖を携へ、頭には輕き鳥打帽を戴きて、思ふまゝに郊外をさまよへば、淺くして不規則なりし呼吸は、正しく深くなり、肺尖は充分に空氣を満たし、血液は鮮になりて、全身に於ける新陳代謝の作用、亦、甚、盛なるに至るなり。

運動に對する、世界各國民の嗜好の度を察するに、生存競争の烈しきところほど、その嗜好も盛なるが如し。日曜日に當りて、歐米大都市の近郊をさまよへば、老人といはず婦人といはず、三々五々相携へて散歩し、殆ど全市を空うずる觀あり。これ、その國民が、身體強壯にして、進取の氣象に富める所以なり。これに反し、支那人、朝鮮人の如きは、室内に

嗜好

身體強壯

睡眠

閑居するを以て樂みとなし、甚しきは鴉片を吸ひて睡眠を貪るの状態なり。國民の元氣沈衰して、邦家も將に危からんとするもの、抑、亦ゆゑなきにあらざるなり。

本邦人が、近來漸く戶外運動の必要なることを悟り、種々の運動法を講ずるものあるは、誠に喜ぶべき現象といふべし。將來、生存競争のますく盛なるに至らば、戶外の運動も亦ますく盛ならしめざるべからず。世人動もすれば、「多忙なるが故に運動の餘暇を有せず」「身體弱くして外に出づる能はず」といふ、あゝ意氣地なき泣言なる哉。何ぞ一歩を進めて、「多忙なるが故に運動す」「身體弱きが故に運動す」とはいはざる。予輩は、一日も早く、すべての人より、この壯快

餘暇

なる言を聞かんことを望む。

さて、散歩は、戶外運動中、最、簡易にして、誰にても行ひ易けれども、あまり簡易に過ぎては興味少く、無意味にこれを繼續せんこと難し。されば、乗馬、ロケットニス、ベースボール、「クリケット」水泳、漕舟、器機體操等に就き、その好めるものを選びて行へば、興味も多く、運動法としては、孰れも弊害少なきものなり。又、擊劍、柔道、大弓の如きも、一種の遊戯として、これを行はば、運動の目的にかなふべきものなり。

(關以雄著衛生讀本)

繼續

二一 天の橋立

毛氈

婆娑

天や、曇りたれど、橋立一覽の念、勃々としてとどめがたければ、小舟をやとひて、朝はやく、宮津の客舎を出て、鏡の如くなる江上を、ゆらゆらと漕ぎ行く。舟は小なれど、苦をか
け毛氈を布きなどして、火桶まで備へたれば、乗り心地いとよし。濱邊に櫂をたて、網を乾したる様の、恰も晝の如くなる漁村を、左にながめつゝ、漸く、松影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向つて進む。

舟子の語り出づる、さまざまの名所話に耳を傾けつゝ、漕ぎ行くほどに、やがて籠神社の前につきぬ。社前の茶店に憩ひて、藁草履にはきかへ、直に成相山に登る。路は嶮しけれど、苦しき程にもあらず。右に折れ左に曲り、上り上りて、

願望

白砂青松

詩趣

傘松の下に到り、首をめぐらして願望すれば、眼前の好風景、まことに日本三景の一たるに耻ぢず。與謝の江與謝の海をかぎれる白砂青松は、恰も浮べるが如く、六里の翠色、遠く萬頃の波光に映じたるさま、晝にも寫しがたく、筆にもあらはしがたし。岩瀧の村、芳野の山、九世の文珠堂は、近く前にありて、黒崎の鼻は、遠く左にあり、釣するあまの小舟、立ちのぼる賤が屋の烟、いづれも、皆、詩趣ありて、おもしろきこといふべからず。

さて、天の橋立股眼鏡とかいひて、こゝに登りて眺望するものは、皆、かくして見るといへば、我もをかしさを忍びて、全景に背を向け、身をかゝめ、頭を垂れて、股の間より窺へば、不

蒼穹

思議や、今まで淡く見えし景色、俄に油畫の如く、「パノラマ」の如くなりて、水の姿、山の粧へ、一しほその趣を添へ、水中に天あるかと疑へば、天上に水あるが如くにて、長橋のその間に架せるさま、まことに蒼穹に立てる虹ともいふべく、また海中に浮島の漂へるともいふべからむ。

建築

成相山より下りて、ひとり天橋の松の間を歩みて、橋立明神の處より、また舟に上りぬ。こゝの松樹の丈の長短不揃にて、老いたるもあれば、また、さまで大きからざるもあれど、下枝は皆よく揃ひて、海波に垂れたる景色、殊におもしろし。切戸といふ處に、智恩寺といふ寺あり。山門も塔も本堂も、建築皆古雅にして、ゆかし。かくて、それより龍燈の松、涙が

磯などいふ名處をば、横にながめつゝ、やがてまた宮津に歸りぬ。(幸田成行著枕頭山水)

二二 森林

西班牙および支那にては、森林を伐りつくして、山に一木をも見ざるところあり。かくの如き地は、往々旱魃うち續き、饑饉となりて、疫病流行することあるなり。近くは、わが國に於ても、福岡縣、和歌山縣などに、洪水を起し、田畑を埋め、家屋、人畜等、莫大の損害をうけたることあるも、皆、これがためなり。森林を伐りて、かくの如き害あるは何故なるか。山林は、高き處にありて、よく雲を引く。しかして、山林は

疫病

人畜

凝集

溫度低きものなるゆゑ、雲は凝集し、雨となりて降るなり。

墟土

然れども、樹木の枝葉茂りて雨水を支ふるゆゑ、雨は一時に地上に降ることなし。かつ、また、山林の地には、落葉あり、墟土あり、樹木の根ありて、水の一時に流出することなく、まづ地中に入りて、徐に谷川に落ち行けば、大雨の時にても、河川の暴漲すること稀なり。然るに、今、山林の樹木を伐り拂ふ時は、小雨にても、忽、谷川に流れ満ちて、暴に河川を漲溢せしむべし、況や、大雨の急に降り下るに於てをや。

漲溢

故に、山林は雨水の調節機と稱せられて、大雨にても洪水を起さしめず、大旱にても河川を涸らすに至らしめず、常に河水の分量を同一ならしむるものなり。山に樹なきとき

蒼海

は、雲これに接するも、雨となること易からざれば、河水も涸るゝに至るべく、また、偶、雨となることあらば、一時に溢出して、田畑を蒼海に變ずるに至るべし。これ、その旱魃を招き、洪水をおこす所以なり。

陰翳

森林は、雨水を調節するのみならず、又、溫度を調節する力あり。すなはち、山林は、夏涼しく冬暖なり。冬暖なるは、その寒風を防ぐがためにして、夏涼しきは、樹木が溫熱を吸収すると、枝葉が陰翳をなすによるなり。

森林は、かくの如き効益の外に、猶、地方の風景を美にするものなり。吾人は、山林を見るに慣れて、別にその美なるを感ぜざれども、樹木なき兀山を見るに及びて、はじめて樹林

菌草

の美を覺ゆるに至るものなり。人の喜びて樹林の傍に居を構へ、魚の喜びて樹林の邊に集るも、これによるなり。その他、森林は、木材を産し、菌草を生ずるなど、その効用擧ぐるに遑あらず。

濫伐

されば、森林は、人類のために實に大切なるものなり。故に、吾人は、森林の害蟲を防ぎ、失火を警め、濫伐を禁じ、大にこれを保護することに注意せざるべからず。(横井時敬)

二三 外國人の勤勉

余、英京倫敦にありて、東京の一友人のもとへ書信をおくべり。その中に、かの國の人の動作を記して、よく働きよく

拮据勤勉

遊ぶ」といひしが、今、歸り來て、かれとこれとを比較するに、更にその差の甚しきものあるを感じたり。

扁舟

かの國の人は、日々職務に従事するに、豫め時刻を定めおき、その時いたれば場にのほりて、拮据勤勉また餘念あることなし。かくて、退散の時刻を報ずれば、猶豫することなく、机を蓋ひ手を洗ひて家にかへる。かくて、直に服をぬぎかへ外出するを例とするが、いづこへ行くかと思れば、沼池に赴きて釣を垂るゝもあり、河流に出でて扁舟を浮ぶるもあり、或は車を走らするもあり、馬に乗るもあり。或は芝生の上に球を擲つもあり、舞樂場に入りて樂器を玩ぶもあり。或は朋友をたづぬるもあり、親戚をおとづるゝもあ

晚餐

り。かく十分遊びくらしして後、家に歸りて晚餐を喫するな
ど、出入・動止時刻のさだめありて、一屈一伸一弛一張すべて
そのよろしきに適せり。尤も出入の時刻、動止の寛嚴は、社
會の貴賤と職業の高卑とによりて同じからず。かの工場
に出でて、日日賃銀を得る者は、晴雨寒暑を問はず、就業の時
限九時間乃至十時間にして、通例朝七時に始めて、夕の五時
又は六時に止む。その規程のととのへる、その約束の行は
るゝ、實に讚賞に堪へざるなり。

賃銀

讚賞

懶惰
遲鈍

今、わが國人の事を執るを見るに、更に時限の規程を踐む
ことなく、その勤むべき時に勤めず、憩ふべき時に憩はず、そ
の懶惰・遲鈍・不規・不正なること、朝野都鄙を問はず、士・農・工・商

一轍

を論ぜず、大約一轍なり。そのうち、最、甚しきを職人とす。
彼等は、その工場に臨むや、火を焚き煙草をのみて、容易に着
手せず、その業に就くも、遲鈍にして戯るゝが如く、空談・雜話、
空しく時刻を消し、約にそむきて耻とせず。かの「染職」の明
後日」といふ諺あるも、亦、宜なり。さて又、家に歸りても、勞を
慰め身を樂ましむることを知らず。或は飲食を恣にし、或
は睡眠を妄にして、攝養の法をだに省みず。かの、朋友をた
づね、親戚をおとづるるが如き、高尚なる樂に至りては、また
問ふべきかぎりにあらざるなり。

攝養

抑、個人にありては、出入度なく動止時なきも、小事に似た
り。されど、これを一都府又は全國にしては、その利害、甚、大

なり。かの西人が、一國の貧富盛衰を卜するに、人口の多寡を以てするは、これ人多ければ業もまた盛なるによるなり。さはいへ、人すくなきも、よく働かば、一人にて三人の業を営み得べく、人多きも、怠らば、三人を合せて一人の効に及ばざるべし。されば、わが國の如きは、未だ人口の多きを以て誇るべからざるなり。(大島圭介)

二四 ジョルジ、スチブソン (その一)

蒸氣機關

「ジェムス、ワット」の蒸氣機關を發明したるは、西曆一千七百六十九年のことなりき。されど、これを應用して鐵道の發明を見るに至るまでには、なほ幾十年の歲月と、幾多の人

の苦心とを要したるなり。かくて、遂にこの發明の名譽を擔ひ得たるものを、英國人「ジョルジ、スチブソン」となす。

温厚

「ジョルジ、スチブソン」は一千七百八十一年一月九日を以て生る。父は、「ニューカスル」の「ウィラム」なる石炭坑の蒸氣機關の火夫なりき。性質頗る温厚にして、よく職業をつとめ、その子「ジョルジ」をば、いかにもして人なみの技師となさむものをと、その事のみ心がけ居たり。されど、かゝる社會の習として、この少年は、學校教育を受くることを許されず。彼は、たゞ、日々、父の役所まで、その辨當をはこび、歸りては、又、その弟妹を遊ばしむるを以て、その務となせり。

辨當

鑛區

「ジョルジ」八歳の時、父は「チュレーバーン」の鑛區に轉ぜし

模造

かば、一家皆、そこに移りぬ。かくて、「ジョルジ」は、ここにて、ある牧場に雇はれて、牧童となり、日給二仙を得ることゝなれり。その業務の暇ごとに、彼は、絶えず、粘土を以てさまざまの機械を模造するをば、無上の樂とせしが、かゝるはかなき遊戯の間には、やくも彼が後年の技巧はあらはれたるなるべし。

敏捷

その後、農家に雇はれて耕作に従事し、ついで、鑛區に入りて、石炭のえりわけに従事せしが、その十四歳に達せし時、父の傍にありて、火夫の職を助くることゝなり、日給一志を得るやうになり、更にまた、汲水「ポンプ」の掛となれり。この頃より、彼の勤勉と敏捷とは、漸く職工間の評判となりたれば、

賞揚

父は大に喜びて、益、彼を奨励せり。

發明

かゝる間にも、例の粘土にて、機械を模造することは、彼が唯一の樂にて、その技倆なかくに見過しが、たきものありければ、ある日、一技師は、頻に彼を賞揚し、汝は機械製造業につくこそよけれ」とて、なにくれと器械の事ども語り聞かせ、ことに「ワット」が新發明なる蒸氣機關のことをば、詳しく説明してくれたるに、彼は熱心にこれを聞き、さてもいかにせむべき書籍多きを」とて、さまざまの書籍を出して、彼に示しぬ。されど、眼に一丁字なき少年の、いかでかこれを解することを得べき。彼は、こゝにはじめて、わが無學の不幸を悟

一丁字

境遇

りぬ。

彼は、志を決して學校に入學せむとせり。されど、今の境遇にて、正式の學校に入學せむこと、おもひもよらねば、先づその邊にありし、夜學校に入學し、隔夜に通學して、讀書と習字とを學びしが、勉強の効、空しからず、期月の後、彼はわが姓名を記し得るやうになれり。これ、彼が十九歳に達せし時なり。彼は、ついで數學を學べり。ことに、その應用問題につきては、非常なる熱心と勉強とを以て、これが解釋につとめたりきとぞ。かくて、その夜學校をば卒業せり。

勞金

まもなく、一機關の長となりて、一週間に一磅の勞金を得るやうになれり。収入のかく増加せしが上に、つとめて節

運命

儉を守りしを以て、今は若干の貯も出來、彼はやがて妻を娶りて、一家をなしぬ。かくて、一千八百三年十二月十六日に、一子「ロベルト」生れぬ。その後、三年ばかり經て、「コリンググオ一ズ」の鑛區より招聘せられて、そこに移れり。

かゝる間に、不幸の運命は、續いて彼の頭上に落ち來れり。その最愛の妻は、ふとしたる病より、遂に不歸の客となり、父はまた、火傷によりて盲目となれり。それのみかは、世の不景氣は、非常なる勢を以てその身邊に襲ひ來りしかば、彼の困難、まことに名狀すべからざるに至れり。されど、彼は、なほ、かの鑛區にありて、機關師の職務をつとめつゝありしが、そこに偶然の出來事ありて、彼の技倆は、遂に大に世にあら

故障

はるゝことゝなれり。同じ鑛山主の所有なる一新鑛區にて、新に備へつけたる汲水「ポンプ」の機關俄に故障を生じて、少しも運轉せず。その道の技師ども、さまざまに工夫をこらし、これを修繕せしかど、遂にその目的を達すること能はざりしかば、一同皆困りはてゝありけり。「スチブソン」これを聞きて、「われ試みに修繕せむ」といひ出でたるに、「さらば、ともかくも試みよ」とて、その機關をまかせられぬ。彼は一週日の間、寢食を忘れて、ひたすらにその工夫をこらし、が、そのかひありて、「ポンプ」は思ふまゝに運轉しはじめぬ。技師等の驚いふばかりなく、擧りて彼の技倆を賞賛したりければ、彼は遂に一躍し

寢食

て機械長に任せられ、二百磅の年俸を受くることゝなれり。これ、一千八百十二年のことなり。

二五 ジョルジ、スチブソン (その二)

歲月は夢の如く過ぎ行きて、彼の一子「ロベルト」も、今は、たくましく若者となれり。「ロベルト」は、きはめて鋭敏なりければ、父も末たのもしきものに思ひ、彼を、「ニューカッスル」の學校に送りて、修學せしめたり。毎日曜日に、「ロベルト」は父を訪うて、おもしろき談話に一日を送るを常とせしが、その折毎に、彼は種々の工業雜誌を買ひ來りて、父と共にこれを讀み、その文章をば、「ロベルト」これを解し、その實地の應用をば、

修學

「スチブソン」これを説きて、父子ともに、その研究を進めたりければ、「ロベルト」の學力の進むと共に、「スチブソン」も、また少からぬ智識を得たり。

宿願

「スチブソン」の熱心と技倆とは、遂に、その鑛山主の心を動かしぬ。鑛山主は、彼が多年の宿願たる、蒸氣機關の發明を大成せしめむが爲に、その資本を給せむことを約せり。

賞歎

「スチブソン」の喜^喜、譬^譬ふるに物なく、彼は晝夜その發明に心を碎けり。やがて、一の機關を發明せしが、試運轉の結果は、その機關の、よく八十噸の荷物を積める車を引きて、一時間に四哩を走るに堪ふることを示せり。賞歎^{賞歎}の聲は、そこに起れり。されど、「スチブソン」は、なほこれを以て満足

せず、進んでその改良をはかれり。

成績

一千八百二十四年には、「ニューカッスル」に、その機關製造場設立せられぬ。ついで、その次年、「スチブソン」は、「ストットン」と「ダルリングトン」との間に、小鐵道を布設して、乗客の運搬に堪ふる成績を示したり。

開通式

ついで、「リバープール」「マンチエスター」線の計畫はじまられり。機關車は勿論、橋梁、「トンネル」、皆、彼の考案によりてつくられたり。一千八百三十年九月二十五日、工事全く成りて、その開通式舉行せられぬ。式場の偉觀いふばかりなく、時の内閣總理大臣をはじめとして、貴族・高官・代議士・紳士、皆その式場に列し、壯大なる儀式はて、後、新機關車は、これらの

貴賓

全速力

貴賓を乗せて、徐に運轉しはじめたり。やがて、一聲の汽笛と共に、機關車は、その全速力を以て進みぬ。その迅速なること、まことに飛ぶが如く、一時間の速力二十四哩と注せられぬ。一大驚歎の聲は、全國に響き渡れり。彼の成功を祝する聲は、またこれに伴へり。

奢侈

一職工、スチブソンStibsonの名は、今や王公をも駕せむとす。されど、彼は少しもその舊時の困難を忘れず。固く奢侈を禁じ、單純なる職工の生活を以て、無上の快樂となせり。晩年に及びても、彼は頗る強壯なりしが、一千八百四十八年八月十二日、突然吐血して遂に起たず。

二六 花と昆蟲

媒介

色彩

密接

花と昆蟲との關係は、極めて密接なるものにして、花は昆蟲の媒介に依りて、花粉の傳達をなすものなり。而して、昆蟲が何故にかく花粉の媒介を爲すかといふに、花の形狀・色彩、美麗にして、且、芳香を發し、よく遠方においても其の所在を知るを得ると共に、中に甘味の蜜を藏するが故なり。この故に、美麗なる花あれば、其處に必、昆蟲ありといふも不可なし。尤も、或種の花は、昆蟲の力を籍らずして、風又は水の媒介により、花粉を他に送ることあり。されど、一般に、美麗なる形狀若くは色彩を有する花は、必、昆蟲と密接なる關係を有するものなりといふことを得べし。

氣象

昆蟲の花を訪ぬる時刻は、場合に依り朝晝夕夜等種々なり。又天氣氣象の如何によりて一定しがたし。季節により、春來る蟲と夏來る蟲と秋來る蟲と異なることもあり。又、花の種類に應じ、それ〴〵特別の蟲をのみ迎ふるもあり。花を訪ねて晝來る蟲は、蝶・蜂・虻等の類にして、時としては、蠅の如き蟻の如き、又、花に入ることあり。又、夕方より夜半にかけて花を訪ふ蟲は、蛾の種類最多し。而して、これ等の昆蟲中、最、人目に觸るるものは、即ち蝶・蜂又は花虻の類なりとす。

蝶、蜂、虻

蠅、蟻

蛾

菜黃麥綠

春日、郊外に出づれば、菜黃麥綠萌ゆるが中に、白蝶黃蝶の繚々として此處に彼處に飛びあそぶを見る。蝶と菜の花

聯想

とは、常に吾人をして聯想せしむるものにして、溫暖なる春光、淡泊なる菜の花の色、それと等しき、又は純白色の蝶、この三者は自然の調和ありといふべし。春漸く老いて、暖氣次第に増し行けば、種々なる花咲き出でて、又種々なる蝶の出で來るを見る。初夏の候、花菖蒲の花咲く頃には、揚羽蝶、又は色黒くして形大なる黒揚羽蝶など、花を尋ねて飛來す。而して花菖蒲の如き、色濃くして形大なる花に、かかる蝶のより來るは、又よく調和せるものなり。

揚羽蝶

調和

花房

藤の花の開く頃には、虻・蜂等の多く來るが中にも、殊に黒く大なる「まるくまばち」の、必、來りて長く垂れたる花房の周圍に、鳴きつゝ、飛べるを見む。其他牡丹、芍藥、石竹、紫雲英、蒲

觀察

公英芥子牽牛花芙蓉菊等種々なる花に種々なる昆蟲の來るあり。八角金盤の花は形小さく色白くて人の注意をひかざれども仔細に之を觀察せば各種の昆蟲を呼び殊に氣候暖かなる日には多くの蜂・虻・蠅等の各自忙しげに蜜を爭ひ求めつゝある様の中々に賑かなるを見るべし。

蝟集

合歡・浮爛羅勒・槐・唾椒はりゑんじゆ等の花咲けばこれ等の木の上に夥しく昆蟲蝟集し花を周りて歌ひ且舞ふが故に自然の音楽を聴く思あり。

凡て是等の昆蟲は孰れも皆花に來りて蜜を吸ひこれと同時に其花粉を體に附着せしめ一の花より出て他の花に往きかくて花粉媒介の道自ら行はるゝなり。

花と昆蟲との關係は斯の如く密接なるものなれば吾人が花を見れば必昆蟲のことを思ひ出し獨花の美のみならずこれを尋ね來る昆蟲をも含めて眺むるの感を起すこと宜ならずや。(三好學)

二七 親友

昔某國に某人あり。その子某齡既に立志に及べり。一日父に向ひ「兒既に長じたれば今より自立の道を講ぜざるべからず。然れども兒猶經驗に乏し。さては櫛風沐雨各地を跋涉して親しく世事の辛酸甘澁を味はむと思へり。この事許させ給へ」と乞ふ。その父「汝の志まことによし。」

櫛風沐雨
辛酸甘澁

旅装

逮捕

淋漓

感然(うれし)

一日もはやく出て立て。たゞ、將來、身を立て家を興さむと思はゞ、先づ朋友を求めよ。これ處世の一大要訣なるぞ。と誠む。こゝに旅装を調へ、去りて周遊すること、期年にして歸れり。父喜び迎へて、「汝朋友を得たるか」と問ふに、「然り、父君の教のまゝに、いたるところに親友を求め得たり」と答へつゝ、指を屈して某の地、某の處の某々を數ふ。父感然として憂色を帯び、「人心變じ易く親友得難し。今汝の得たる朋友果して眞なりや否や、余、今よりこれを試みむ」とて、飼ふところの豚を屠り、鮮血淋漓たる肉を囊に盛り、その子にこれを負はしめ、まづその親友といふ一人の家に行き、こゝにこれ「事あり君を煩さむ。わが父、人を殺し、まさに逮捕せられむ」とす。請ふ庇護せよ」と、告げしむ。その人、顧みて他をいひ、請を容れず。乃ち去りて、また他に行き、所謂親友を歴訪して前言を反覆せしめしかど、一友の身を挺し心を傾けて、その難を救はむとするものあるを見ず。こゝに、父その子に向ひ、「見よ、汝今日始めて人心の知り難く、親友の得易からざるを悟りしならむ。更に今より余の親友を訪ひて、その眞なるや否やを試むべし」とて、この度は自らその囊を負ひ、馳せて一親友の門に到り、「拙兒人を殺し、難測られざるにあり、君願くばこれを救へ」といひしに、主人錯愕措くところを知らず。急遽門を開き、二人を後堂に誘ひ入れ、まづしばしこゝにあり。徐に謀るところあるべしといふ。こゝに父

庇護

錯愕

とす。請ふ庇護せよ」と、告げしむ。その人、顧みて他をいひ、請を容れず。乃ち去りて、また他に行き、所謂親友を歴訪して前言を反覆せしめしかど、一友の身を挺し心を傾けて、その難を救はむとするものあるを見ず。こゝに、父その子に向ひ、「見よ、汝今日始めて人心の知り難く、親友の得易からざるを悟りしならむ。更に今より余の親友を訪ひて、その眞なるや否やを試むべし」とて、この度は自らその囊を負ひ、馳せて一親友の門に到り、「拙兒人を殺し、難測られざるにあり、君願くばこれを救へ」といひしに、主人錯愕措くところを知らず。急遽門を開き、二人を後堂に誘ひ入れ、まづしばしこゝにあり。徐に謀るところあるべしといふ。こゝに父

その子を顧みて、汝知れりや、わが所謂親友はかくの如きのみ」といふに、子ははじめて父の誠の言の味あるを悟れり。さて實をもてその親友に告げしに、その友大に心を安め、かの負ふところの豚を烹て、共に祝盃を擧げたりといふ。

(千頭清臣)

二八 金崎城址

汽笛の聲に夢さむれば、船は敦賀灣に著きたり。そよそよと吹き來る曉の風こちよく、夜はほのぼのと白み、一帯の松原とおぼしきあたりに、月なほ明なり。舳船こゝろねに乗りて波戸場に著き、そこより車に乗りかへて、停車場の旅店に投

舳船

波戸場

素通

兵燹

ず。一番汽車に乗りて、北陸道の方へ行かむと思ひしが、折角、歴史に古き北陸の要港に來ながら、素通にするは心なきわざと思ひかへし、二番の汽車に乗ることゝ定めて、車を飛ばして、まづ氣比神宮に詣づ。北陸第一の宮居なれど、織田信長の兵燹へいべんにかかりてより、また舊觀に復せざるか。境内も狭くして、官幣大社には似合しからず。神前にぬかづきて、仲哀天皇神功皇后の古をしのびまつるも、いとかしこし。これより十町ばかり北に行きて、金崎宮に詣づ。

祠は、官幣中社にて、尊良・恒良、二親王を祀る。むかしの金崎の城址、尊良親王の自害し給ひしところ、延元の昔を思へば、誰か涕涙なみだなからむや。新田義貞が、比叡山上に熱涙を揮

涕涙

列強

國幣
小社
中社
大社

官幣
小社
中社
大社

兵燹

悲劇

うて、後醍醐天皇に別れまつり、皇太子恒良親王と尊良親王とを奉じて、この雪深き北陸の地に落ち來りしは、げに何等の悲劇ぞや。金崎の孤城、賊の大軍に圍まれて、勢日にちぢまりければ、外に援を求めむとて、義貞は弟の義助と共に、城を出でて、^ノ杣山に據り、金崎を援けむと心を碎きし程に、城はやくも陥りぬ。城を守りしものは、義貞の長子義顯なりけるが、そのいかにともすべからざるを見て、尊良親王の前に跪きて、「今は力及ばず、臣は將家の子、城を枕にして死せざるべからず。殿下は皇室の^ウ冑、賊といへども害を加へ奉らじ。暫くここを落ち延び給へ」と、涙ながらに申しければ、親王うち笑ひ給ひ、「われは元帥ぞ、徒に命を惜むものと思ふか。

元帥

ぬめる

ただわれ自害の法を知らず、汝よくこれを教へよ」と、いとけなげなる御ことばに、義顯さらばとて、刀ぬきて腹かき破り、その刀を親王に進めて伏しぬ。親王その刀を執り給ふに、血しほぬめりて握るべからず。すなはち衣の袖にて卷きて、おなじ^ニ双に伏し給ひぬ。ああ、何ぞその悲壯なるや。皇太子恒良親王は、尊良親王の御弟なり。城陥る前に、遁れ出で給ひしが、賊に捕はれ給ふ。城陥りて後、賊城中を検するに、義貞兄弟の首なければ、親王に向ひてその存亡を問ひまつりしに、「既に自害してその屍骸は焼き棄てたりと聞きぬ」と答へ給ひければ、大に安心して親王を京師に送り、尊氏これを幽し奉りぬ。然るに、義貞は眞に死せるにあらずして、

屍骸

暴戾

柚山城より起りて、賊の數城を抜きければ、尊氏大に親王を
 忌み、毒藥をすすむ。親王毫も臆せず、悠然として、これを仰
 いて、薨じ給ひぬ。慘又慘、賊の暴戾、何ぞ一にここに至れる
 や。往事茫茫、ここに五百年、城址の山海陸より起つて東に
 走り、綠林滴るが如く、また碧血の痕をとどめず。われ、史を
 讀んで、二親王が壯烈なる御心と、悲慘なる御最後とに泣く
 こと、久しかりしが、今現にその古城址に來り、二親王を祀れ
 る祠前にぬかづきて、いよいよ感慨に堪へず。曉深うして
 石壇、人なく、わが振る神鈴の響、木魂に徹す。山、沈沈として
 恨を含み、北海の浪むなしく、山脚にむせぶ。情を知らざる
 車夫に促されて、去つて、山の一角の海に臨める處に行き、あ

木魂

森漫

づまやに憩ひて眺望す。敦賀灣、鏡の如く、山、周匝して北に
 走り、相合せむとして合せず。その間、森漫たる日本海をあ
 らはす。この處の山容水態、遙に宮津灣にまさる、また橋立
 あるを要せざるなり。強ひて橋立に比すべきものを求む
 れば、それ氣比の松原か。

縦横

氣比の松原は、敦賀町よりつづきて、直ちに海に接す。縦
 横十數町、老松その幾萬億株なるを知らず。金崎城址より
 敦賀の市街を隔て、彼方に望みしも、曉の涼しさに、車夫勢
 よく、またたくひまに、身ははや松林の中にあり。砂白く松
 青く、しかも、その松ものふりて、或は直立し、或は偃臥し、四顧
 その盡くる處を見ず。冷露、聲なくして、人の衣を沾す。天

偃臥

清絶

の橋立の一筋なるにまさりて、天下有數の清絶なる松原とぞおほえし。

この清絶なる松原の中に、水戸の義士武田耕雲齋など、三百七十三士の墓あり、祠もあり。耕雲齋の義兵、奸黨の大兵の爲に破られ、京に上りて心事を白さむとて、路を北陸道にとりしに、捕はれてこの敦賀に幽せられ、終に慶應元年、幕命によりてこの松原にて斬に處せられぬ。ああ、誰か彼が孤忠に感泣せざらむや。

金崎城址には、尊良親王の毅魄いへいとこしへに鎮まり、氣比の松原には耕雲齋等の忠魂、夜雨に哭す。敦賀の地、何ぞ蒼蒼としてしかく古意の多きや。(大町桂月)

忠魂

二九 錢屋五兵衛

兩替

錢屋五兵衛は、明和八年を以て加賀の國に生る。その家代々兩替を業とし、地方に名高き家柄なりしが、父の代に至りて、家産を傾けたり。五兵衛、幼き時より大志を抱き、いかにもして、身を立て、家を興さむと心がけ、十四歳の時、金澤の豪商木谷某に仕ふ。木谷は藩の御用達にして、數多の船舶を所有し、貨物を運搬するを以て業とせしが、取引先は廣く全國に及びたりき。

御用達

木谷藤右衛門

遭遇

五兵衛は、木谷に仕ふること十五年、専ら力を航海と貿易とに盡し、刻苦勵精、さまざまの難に遭遇しけるが、三十歳の

郷國

遺利

制度

時、獨立の營業を思ひ立ち、木谷の助力を受けて、一船の主となり、米穀を積み込み、松前港に到り、海産物と交易し、これを郷國に賣りて大利を得たり。是よりますます身を碎きて、その業を勵みければ、販路いよいよ廣まりて、北は松前より、西は長崎に至るまで、殆ど到らざるところなきまでになりぬ。五兵衛おもへらく、内地の商業はいかに販路を擴張するも、何ほどの事かあらむ、いでや、廣く外國貿易を試みて、こゝに己を利すると共に、國益をもはからむこそ、大丈夫の本色なれと。されど、當時鎖港の制度、甚嚴にして、その志を遂ぐる機會なかりければ、せめては、日本海のかぎり、あらゆる島のはてまでも船を寄せて、遺利を求めむものと覺悟を

端緒

定め、北は蝦夷の擇捉島より、南は三宅島に至るまで、常に回航貿易することを怠らざりき。

ある時、擇捉近海の航海中、ゆくりなくも露船に出で逢ひて窮追せられ、逃ぐるに道なく、遂に捕はれて露船に到れり。これぞ却りて、五兵衛が一旦斷念せし外國貿易を開くの端緒とはなりける。この時、彼我の言語もとより通ぜざりしことなれば、船長は或は手を以て形容し、或は目を以て示しなどしけり。そのさま、われに貿易を求むるものゝ如くなりしかば、五兵衛は、それを悟るや、かねて懐ける大望をはたすはこの時なりと、心ひそかに喜びつつ、試におのが積み載せたる貨物を、悉く陳列して彼に示したるに、彼も亦その携

鬻ぐ

ふるところの貨物を陳列して、五兵衛に示せり。かくて無言の間に交易を了り、これを積み歸りて内地に鬻ぎしに、珍奇にして便利なる品の事とて、莫大の利を得たり。その後、たびたび貿易を試みしが、これが爲に、資産頓に増加し、その名、廣く世間に著はれぬ。

千石積

櫓

茲に至りて、五兵衛はなほ自ら足れりとせず。天保三年、年六十二の時、新に二千五百石積の船を造りて、擇捉島に向ひしが、中途不幸にして颶風に逢ひ、櫓は折れ、帆は裂け、櫓も擢も摧けて、船はその用を爲さず、心ばかりははやれども、身體疲れて如何ともせむ方なく、たゞ運を天に任せて、浪のまにまに大洋に押し流さるゝこと凡そ百餘日、その間薪炭は

漂着

竭き、用水は絶え、米あれども炊ぐことかなはず、僅に生米を噛みて命をつなぎ、終に米國の西海岸に漂着して、土人に救はれたり。この時五兵衛は、はやくも米國の富盛を見て、將來この地に貿易を開かむと覺悟を定め、米國人と交ること數旬、米船に送られて、無事にわが國に歸航せり。

提灯

五兵衛の米國にあるや、あらかじめ、貿易を約するところあり。天保四年、前約を果さむとて、大平丸と云ふ二千五百石積の船に乗り、提灯、赤合羽、扇、團扇等の雜貨を積み込み、家人の泣きて止むるをも聽かず。いつはりて三宅島に航すと稱して、竊に米國に渡りぬ。米人その豪膽なるを嘆賞し、日本錢屋五兵衛の名、全國に鳴り渡りきとぞ。その後、五兵

豪膽

衛は、番頭市兵衛をして、しばしば米國に渡航せしめ、老の身をも顧みず、健氣にも遠洋貿易に従事したりけるが、嘉永五年、八十二にて病死したりき。(久松義典)

三〇 半家村

土佐の國幡多郡の半家村と云ふ里は、四萬十川の水源にて、左も右も水を挾みて巖壁きりたちたれば、世ばなれて人うとき處なり。古くは家五六十戸ありしが、おひおひ人口おほくなりて、今は七十一戸になれりとぞ。その風俗敦朴にて、すこしも今様めける事に移らず。農工商入りまじり、産業異なりといへども、情誼ともにあつくして、吉凶禍福相

巖壁

敦朴

吉凶禍福

賦役
流離
浮浪
間人

救ひ、田租をはじめ、およそ公に納むる物、皆期にさきだちてたてまつり、未だ郡吏の督促を受けしことなし。されど、或は齡老いし親の侍養のため、或は自己の疾病のため、業を怠るたぐひ、山中の民といへども、もとより遁れぬところなれば、おのづから、富めるも貧しきもありて、ことごとく均しくはあらず。若、さる者ある時は、村中語らひあはせて、與に共に力を添へ、賦役をととのへしめて、破産に至らざらしむ。故に凶荒の歲に遇ふといへども、更に逃亡流離の者なし。されどまた、たまたまは恒の産なき浮浪の者もなきにあらず。これをば間人と呼べり。間人のたぐひは何處にもありて、皆、公役をつとめぬものなるを、この半家村の間人等は、

無頼

公役をつとめて恒の産あるものに同じ。ある役人これを怪みて、汝等は公役すべからざるものなり。然るを猶つとむるは、村人おのれ等が勞を分たむがために、汝等に推しおよぼすにはあらずや」といひければ、間人等同じ聲に答へて、「しかには侍らず、おのれ等不幸にして間人なりと雖も、朝夕やすくこの村中に眠食するは、皆公の御陰なれば、その國恩報いずてやはあるべき」といへり。さる者どもの中には、無頼の徒もあるべきを、この村の間人はかくの如し。

今は昔、享保の末にやありけむ、八右衛門・新右衛門といふ二人の者ありけり。同じ程に病に臥し、久しく農業を廢して、いつしか貧乏になりければ、家に傳へ持ちたる田畠を公

看護
褒賞

に奉りて、間人にならむとせるを、庄屋某聞きて、「かの二人は處につきて、舊き家柄の者どもなり。然るを病ゆゑに産を破らしむるは誠に憫むべきことのかぎりなり」と、村人を諭して、かはるがはるその田畠を耕し作らしめ、遂に間人になる事をまぬがれしめけり。そのよし國主に聞えけるに、村人等が看護の勞をめで、米四十三俵を各戸に分ち賜ひけり。されど、さばかり厚き褒賞をも、あながちに榮としも思はず。さるは、かく互に救ひ合ふなどの事は、皆、同保當然の職分なりとして、公の賞賜を却りて怪しく思へばなり。

かく七十餘戸悉く一家の思をなして、世を過すまゝに、宅を構ふるにも、村中相戒めて、たとひ餘財のある者とても、ひ

造作

明治實業讀本卷の一

二四

ろき造作をば堅く禁じ、梁木三間に餘るをば用ひしめず、またその土産の茶楮皮葛粉蕨繩の類のものは、皆村中均分し、また租米を獻るにも、たとひ田地に豊耗のわかちありと雖も、收むるところを合せてこれを輸す。故に少しも多寡の偏あることなし。さればさきにいへる間人といふもの、稀にはなきにしもあらざれど、貧富の差さのみなければ、かの朱陳村の故事さへ思ひ出でられて、めづらしさのあまり、一筆こゝにかきとゞめぬ。(近藤芳樹著明治孝節録)

明治實業讀本卷の一終

明治四十二年二月十九日印刷
 明治四十二年二月廿二日發行

明治實業讀本全八册
 定價金貳拾五錢



著者 中村康之助
 泉屋清次郎
 森山章之丞
 青木弘
 印刷者 青木弘
 印刷所 株式會社 秀英舎 第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

發兌

東京市神田區表神保町二番地
 電話本局四三七一 一五三九
 振替貯金口座 一三三五

同文館

大賣捌

東京神田 東京堂
 大阪東區 寶文館
 東京牛込 同文館支店
 韓國京城 日韓書房

Kaye

広島大学図書

2000054287

